

マントヴァの宮廷ユダヤ人芸術家

——ゴンザーガ家の庇護との関係から——

萩原里香

はじめに

北イタリアに位置するマントヴァは、ルネサンスの時代に芸術の分野で繁栄した中都市である。フランチェスコ2世 Francesco II Gonzaga (1466-1519, マントヴァ侯: 1484-1519) に嫁いだイザベッラ・デステ Isabella d'Este (1474-1539) が多くの芸術家を庇護して以来、有数の芸術都市となっていた。音楽史においては、バロック時代初期、1607年にクラウディオ・モンテヴェルディ Claudio Monteverdi (1567-1643) が、音楽劇《オルフェーオ *L'Orfeo*》を作曲した地として知られる。音楽劇は1600年にフィレンツェで誕生するが¹、《オルフェーオ》こそ、音楽劇史において最初の「傑作」であり、現在もたびたび上演される当時の最重要作品である。

音楽劇は、その誕生以前より宮廷で催されていた舞台芸術が音楽を用いて展開されたことによって出来上がったものと言える²。16世紀、イタリアの宮廷では、競い合うように、荘厳かつ華麗なスペクタクルが催されており、本論で取り上げるマントヴァのゴンザーガ家の例もそのひとつである。マントヴァの舞台芸術の歴史としては、15世紀まで遡ると、1480年にアンジェロ・ポリツィアーノ Angelo Poliziano (1454-1494) が牧歌劇『オルフェーオ 寓話劇 *Favola d'Orfeo*』を上演したことが知られる。それ以降、《オルフェーオ》が作曲されるまで、この都市の舞台芸術はどのような実態にあり、「傑作」を生み出すまでの土台はどのように基礎づけられたのか。それを探る過程で、16世紀を通してこの地のユダヤ人たちが宮廷での上演にかかわっていた事実に注目するに至った。

マントヴァのユダヤ人たちは「イスラエル組合 *Università degli ebrei*」と呼ばれる自らのコミュニティを持っていた（コミュニティを持っていたことは、ローマ、ヴェネツィアなどほかの規模の大きな都市と同様である）。そして、ユダヤ人コミュニティのメンバーたちは宮廷で行われる舞台上演に従事しており、それはマントヴァの舞台芸術の在り方の特徴のひとつと考えられる。よって本論文では、マントヴァのユダヤ人たちの舞台芸術とのかかわりについて一次資料から考察し、どのような部分でその発展に大きく貢献したのか、大作曲家モンテヴェルディへの影響の有無についても検討しながら、明らかにすることを目的とする。



マントヴァのドゥカーレ宮殿（2017年筆者撮影）

1. ルネサンス時代のユダヤ人とマントヴァのユダヤ人³

1-1. 時代背景

まず、キリスト教社会におけるユダヤ人という存在を簡潔にまとめておきたい。北イタリアにおいて、ミラーノ、パヴィーア、ルッカ、ヴェローナ、モーデナなどにもユダヤ人コミュニティは存在していた。このマントヴァでは、遅くとも1145年よりユダヤの生まれであるいくつかのファミリーがいたとされる⁴。基本的にユダヤ人たちはどの町でも寛大な君主によって保護されていたが、彼らと他のキリスト教市民の間で、宗教の違いや特権を原因とする争いに巻き込まれたり、選択できる職業にも制限を設けられたりした。当局や高位聖職者たちは、ユダヤ人への差別は無意味であること、それ以上に、彼らの商業や医学などの才は利用する価値があることを理解していた。やがてユダヤ人たちは、教会法によってキリスト教徒たちには就くことのできなかつた金融業で成功した。マントヴァでも同様であり、ユダヤ人人口も増えていった。

1555年、教皇パオロ4世は、すべての教皇領の都市において、街の一角（ゲッター）にユダヤ人たちを幽閉するようにとの命を下す。この流れは北イタリアにもやってきて、1590年代の終わりには、ユダヤ人たちはミラーノやフェッラーラから追い出された。しかし、マントヴァ公グリエルモ・ゴンザーガ Guglielmo Gonzaga（1538-1587、在位:1550-1587）は、マントヴァのユダヤ人たちに対してそのような措置はとらなかった。グリエルモ公は、銀行家としての彼らを頼っていたし、その上、彼らから支払われる税金は宮廷にとって欠かせないものであったからだ。それゆえ、キリスト教市民の反ユダヤへの感情が高まりつつあったにもかかわらず、マントヴァのユダヤ人たちは17世紀の初頭までゲッターに追いやられる

ことはなかった。グリエルモとその次のヴィンチェンツォ Vincenzo Gonzaga (1562-1621、在位 :1587-1612) の治世の間、ユダヤ人たちは寛容な環境を享受できたのである。

ユダヤ人の大部分は現在のサン・ピエトロ S. Pietro 地区 (街を四分したときの北東にあたる)、ドゥッカーレ宮殿の南側で、エルベ広場の東側に居住していた。現在にもわずかにその痕跡を残している。

ユダヤ人たちを利用することは好都合であるという認識は、マントヴァを芸術都市へと導いたイザベッラ・デステの例からもわかる。すでに述べたように、迫害された地域のユダヤ人たちは避難を余儀なくされたが、世界中に散在するコミュニティ間のつながりは強く、このことが、彼らの商人としての成功の重要な要素であった。芸術コレクションに情熱を注ぐイザベッラはまさに彼らのネットワークを頼っていた。ユダヤ人とマントヴァ当局との関係は良好であり、彼らの活動は、さまざまな分野、例えば技術の分野や医学の分野で重宝された。そして、本論で取り上げる音楽や舞踏、演劇などの舞台芸術も、彼らの才が発揮された分野であり、他分野同様、マントヴァの都市としての発展につながっていると考えられるのである。

演劇とユダヤ人に関して、一般的に、彼らは宗教劇を行う習慣があった。中世の時代、プリム祭 (ユダヤ人の記念祭) においてモルデカイとエステルを上演していたのである。また迫害の一種として、ユダヤ人たちは、キリスト教の行事である謝肉祭に参加することを強いられ、ゲームのコマとして扱われていた。それから逃れるためには、高い税金を払う必要があった。このような義務の代わりに、マントヴァでは市民の義務として、ユダヤ人が宮廷のために劇的な舞台を企画・制作し、それをコミュニティの負担で上演していた。それは尊厳と権利を保証する方法だった。こうした習慣とともに、徐々に、マントヴァのユダヤ人たちは舞台芸術のオーガナイズに長けていった。

1-2. コミュニティの演劇活動

記録に残る最も古い例は、1489年、ついで1520年の上演であるが、初めて、ユダヤ人たちによって制作から上演まで行われたのは1525年であった。この時期より、ひとつの「劇団」として、最初から最後まで自分たちで公演をオーガナイズし、そしてゴンザーガ家の宮廷において定期的に演劇を上演するようになる。彼らの「劇団」は、踊りと歌と音楽を愛するセミプロのような、徐々に永続的かつうまく組織された「演劇集団」となっていった。宮廷で行われた彼らの上演は、外国からの賓客のもてなし、各種祝典、結婚式、戴冠式などのためであった。上演作品としては、例えば、ジョヴァン・パッティスタ・ジラルディ・チンツィオ Giovan Battista Giraldi Cinzio (1504-1573)、トルクァート・タッソ Torquato Tasso (1544-1595) ら、同時代の偉大な作家たちの作品であった。そして、コミュニティからも一人の重要な作家が輩出されている。レオーネ・デ・ソンミ Leone de' Sommi (c.1527-c.1592) という名の彼は、1580年から1590年までにコミュニティによって上演されたすべての作品

を書いている⁵。彼はマントヴァで生まれ、この街の演劇文化のために尽力するが、彼の活動を庇護していたのは、ゴンザーガ家の分家で、グェスタツラを治めるチェーザレ・ゴンザーガ Cesare Gonzaga(1533-1575)⁶とその息子のフェツランテ Ferrante(1575-1621)、さらには、ノヴァッラーラの領主であったフランチェスコ2世・ゴンザーガ Francesco II Gonzaga(1519-1577)であった。

レオーネ・デ・ソンミとはどのような人物か。彼についての研究は少なくなく⁷、彼の著書である『上演芸術に関する4つの対話』(1556年以降)⁸より読み取れる、その人物像をまとめておこう。この著書に登場する一人の人物がデ・ソンミ自身であると解釈されており⁹、ヴェリーディコと呼ばれるその人物は、「テラー¹⁰」でもあり、「称賛に値するような詩を生み出す職人¹¹」、つまりは作家であり、そのうえ、「演劇を創り出すよりも、それを指揮する方法に精通している¹²」ことから、監督のような人物と言える。よって、デ・ソンミ自身も「テラー」、「作家」、「監督」として活動していた総合的な演劇の専門家であり、さらに「役者」でもあったと考えられる¹³。下記はデ・ソンミへ仕事を依頼する内容が書かれた、1591年にムツィオ・マンフレーディ Muzio Manfredi (c.1535-1609) から送られた書簡の一部である。

ひと月半ほど前のことですが、あなた様の公爵殿下に私の舞台用の田園詩¹⁴をお送りさせていただきました。殿下がそれを上演してほしいというご意向をお示しになりましたら、コラーゴの役割をあなた様にやっていただけないかと、考えております¹⁵。

この書簡で、マンフレーディは、デ・ソンミに「コラーゴ」の役割を依頼している。この「コラーゴ」という立場については、約40年後の1630年ごろに不明著者によって著された『コラーゴ—よき舞台を作るための考察—¹⁶』によって次のように定義されている。

称賛と喜びをもって、詩が求めている統一感と道徳的成果を密かに含めながら、詩人が作り出した演劇の物語を完璧な舞台へと実現するために必要な方法や手段を決める能力をもった人物¹⁷

したがって、「コラーゴ」は、演劇を企画し運営することのできる能力を持ち合わせ、舞台制作に関する責任を負う人物と理解できる。ヴェリーディコの人物像よりも幅広い職務であるが、デ・ソンミは「コラーゴ」と呼ばれることになる、上演を統括する舞台の専門家の最初期の例であると言えよう。

また、デ・ソンミは貴族のサークルにも参加していた。詩や文学、演劇を愛好する人たちの集まりである「アッカデーミア・デッリ・インヴァギーティ Accademia degli Invaghiti」

と呼ばれるアカデミーである。1562年に、チェーザレ・ゴンザーガによって設立された。この人物は、前述した通りグェスタツラ伯であり、デ・ソンミを庇護していた人物でもある。デ・ソンミはこのサークルのために多くの作品を書いたが、ユダヤ人ということを経由して正式なメンバーではなかった。彼は「scrittore（作家）」という肩書で執筆し、アカデミーの活動に貢献した。よって、チェーザレは、当時の反ユダヤの風潮のなか、ひとりのユダヤ人の活動を支えるために、公式にはないけれども、アカデミーの活動に彼を参加させたと思われる。とはいえ、アカデミーのメンバーのなかには、宗教の異なる彼により目を向けない者もいた。特に、2度もアカデミーのトップを務めたベルナルディーノ・マルリアーニ Bernardino Marliani は、デ・ソンミの参加を拒否していた。

1567年4月15日、デ・ソンミはコミュニティの代表として、ノヴェッラーラ伯フランチェスコ2世を通じて、グリエルモ公にある嘆願書を提出した。それは「生業として演技をする人[喜劇役者]たちのために、喜劇を上演するための小屋をマントヴァにつくっていただきたい¹⁸」というものである。この嘆願がグリエルモ公に認められたかどうかははっきりしていないが、演劇のプロフェッショナルの地位を世の中に浸透させていくきっかけになったと言われている¹⁹。同じ年の7月、公爵の秘書ルイーギ・ローニャ Luigi Rogna は、街の状況に関する報告書を作成している。報告書から、街にはコンメディア・デッラルテの2つのグループがいたこと、毎晩彼らは有料の演劇の公演をオーガナイズしていたこと、そしてたくさんの市民がそこへ通っていたことがわかる²⁰。コンメディア・デッラルテの常設の劇場が当時すでに存在し、有料で運営されていたことから、演劇がマントヴァ市民の娯楽となっていたと言えよう。

デ・ソンミ以外にも、役割のわかっている数人のユダヤ人を挙げると、すぐれた俳優として重宝されたシモン・バジレーア Simon Basilea、1590年代にコミュニティ内の多くの作品を監督したアブラーモ・サルファーティ Abramo Sarfati、宮廷ハーブ奏者でもあったアブラーモ・アビアーティコ Abramo Abiatico (dell'Arpa)、そして作曲家のサラモーネ・ロッシ Salamone Rossi (1570-c.1630) らがいる²¹。ロッシはシナゴグのための音楽を多く残している。劇団とどの程度密にかかわっていたのか不明であるが、インテルメディオなどの劇音楽を作曲した記録も残っている²²。

以上、ユダヤ人への一般的な扱いとマントヴァでの扱い、レオーネ・デ・ソンミという舞台を統括のできる有能な人物の存在を通して、コミュニティの活動を振り返った。次に、具体的な催しを通して、残された情報からユダヤ人芸術家の個々の例を見ていきたい。

2. ユダヤ人芸術家の役割

本節ではユダヤ人が個別にかかわったイベントを通し、彼らがどのようにかかわっていたか振り返ってみたい。まず、先にも触れたマンフレディが「コラーゴ」の役割をデ・ソ

ンミへ依頼したイベントについてである。

2-1. マンフレーディの『セミラーミス』

ムツィオ・マンフレーディもまたアカデーミア・デッリ・インヴァギーティの作家であったが²³、彼は、自身の牧歌劇『セミラーミス *La Semiramis*』の上演を実現させたく、そのために、1591年に3人の芸術家に書簡を送っている。一人目がレオーネ・デ・ソンミであり、11月18日付で、すでに引用した通り、「コラーゴ」の役割を依頼した。その翌日、マンフレーディはイザッキノ・エブレオ Isacchino Ebreo (c.1610没) という人物に依頼を送っている。この人物は、長きにわたってゴンザーガ家の宮廷に仕えていた踊りのマエストロ *maestro di ballo* であり、Ebreo²⁴ という名からわかる通りユダヤ人である。以下、一部引用する。

コーロ（合唱隊）の4つのカンツォネッタを確実に歌ってもらおうと同時に踊ってもらいたいのです。よって、あなた様に踊りを創作していただきたいのです²⁵。

これより、マンフレーディはイザッキノ・エブレオに、合唱隊がカンツォネッタを歌いながらも踊ることのできる振り付けの創作を依頼していることがわかる。さらに翌日、マンフレーディは当時のゴンザーガ家の宮廷楽長であったジャケス・デ・ヴェルト *Giaches de Wert* (1535-1596) に次のような内容を送っている。

公爵殿下は私がお送りした田園詩を上演されたいとおっしゃることと存じます。当然、殿下はそれに必要な音楽の創作をあなた様にお命じになることでしょう。そのために、私はレオーネ氏とイザッキノ氏へ、前者には衣装について、後者には踊りに関する注意点を挙げて手紙を書きました…²⁶

マンフレーディは、作曲を間接的に依頼すると同時に、レオーネ・デ・ソンミがコラーゴであり、イザッキノ・エブレオが踊りのマエストロであることをヴェルトへ知らせている。つまりは彼らとの協力体制を求めることを促していると考えられるが、その順序としてコラーゴ、踊りのマエストロ、最後に作曲家へ依頼していたのである²⁷。

ここでは、イザッキノ・エブレオというユダヤ人が存在したことに注目できる。「踊りのマエストロ」という立場であったこの人物は、同じ時期に計画された別のイベントにもかかわっている。

2-2. グアリーニの『忠実な羊飼』

1591年に、バッティスタ・グアリーニ Battista Guarini (1538-1612) の『忠実な羊飼 *Il pastor fido*』の上演の計画が始まった²⁸。きっかけは公子ヴィンチェンツォの興味である(上演が実現したのは企画開始から7年後の1598年のことである)。宮廷の役人の間でやりとりされた文書から²⁹、上述したイザッキノ・エブレオの名前が何度か確認できる。『セミラミス』のときと同様、踊りにかかわっている。

宮廷秘書のアンニーバレ・キエッピオ Annibale Chieppio は、上演準備に関してマントヴァ公に幾度か報告している。例えば、11月26日に「盲女の踊りの監修を、ユダヤ人のイザッキノ氏に改めて委託しました…³⁰」と書いており、振り付けをイザッキノ・エブレオに依頼したことがわかる。続いて、同年の12月23日、同じくキエッピオは公爵に次のように綴っている。

盲女の踊りが課題となっております、というのも、陛下の御前ですでに稽古した者たちの数人が欠け、数人は調子悪く、数人は参加したくないと言い張っているのです。実はかなりの日数、イザッキノ氏が不在であったために、ふりだしに戻ってしまいました。よってさらに困難な状況です…³¹

この書簡より、イザッキノ・エブレオの存在が非常に重要であることがわかる。彼が不在であれば、稽古が思うように進まないどころか、ふりだしに戻ってしまう状況であった。この年の上演は叶わなかったが³²、1592年の5月9日に準備が再開した。宮廷秘書のバルダッサーレ・カステリオーネ Baldassare Castiglione が別の役人に「役者たちと踊り手に稽古を開始させるために、ヴェスコヴァードで彼らに会ってほしいという依頼を、ユダヤ人へ送りました³³」と綴っているのである。カステリオーネが依頼を送った「ユダヤ人」の名はこの書簡には書かれていない。6日後の5月15日付で同人から役人に宛てられた文書に、役者たちのリストが添付されている。役者たちの名前の下方には、踊り手たちの名前も列挙されており、それらの名前に続いて、以下の一文が書かれている。

遣いの者が公爵殿下のところへこれらすべての者をお連れします。踊りの稽古が終わるまで、毎日イザッキノ氏のところへと通うよう彼らにお命じくださるでしょう³⁴。

ここでははっきりと「イザッキノ」という名前が記されている。したがって、5月9日の書簡に述べられた「ユダヤ人」はイザッキノ・エブレオであると考えられよう。

さて、このイザッキノ・エブレオについて確認しておきたい³⁵。彼の名前は、イザッキノ Isacchino もしくはイアッキノ Iachino と表記され、苗字は1599年の支払い簿によると

マッサラーノ Massarano である³⁶。また、プロフェータ Profeta やプレフェット Prefetto、もしくはベルフェット Perfetto という表記も見られる³⁷。彼はリュート奏者、ソプラノ歌手、そして踊りのマエストロとして知られていた。1583年にベルナルド・ピーノ Bernardo Pino da Cagli (1520~30-1601) の『不当な怒り *Gli ingiusti sdegni*』のための踊りをアレンジした踊りのマエストロとして、また、1584年には、ファルネーゼ家の宮廷で行われた祝典ためにマントヴァのユダヤ人演劇カンパニーの一員として活動した。その後、1598年にはレオーネ・デ・ソンミの『3人姉妹 *Le Tre Sorelle*』、1605年にはニココロ・グラッシ Niccolo Grassi の『愛の発作 *Accessi de Amor*』、1606年にはタッソーの『アモールの悪戯 *Delli Intrighi de Amor*』などに従事した。さらには、精肉店 banca da beccaiolo を営んでいた、裕福な人物であったと思われる。

彼が精肉店を営んでいたことは、彼が没した際の公爵令状 mandato ducale (1610年7月29日) に³⁸、遺産のことが記されているためにわかっている。そこに記された彼の苗字は Massarano ではなく、della Profetta である。そして相続人として記されているのが、イザッキノー・エブレオの息子とされる「ジョヴァンニ・バッティスタ・レナート Giovanni Battista Renato」である。この息子の名前について、ゴンザーガ家の Rollo della famiglia (使用人リスト) で確認したところ、1621年のリストの中に³⁹、Giovan Battista Perfetto という表記があり、さらに役職が「ballarino」、つまりは踊り手であったことがわかった。

この踊り手であるジョヴァンニ・バッティスタという名前は、モンテヴェルディともかわりがあることが思い出される。

2-3. 1605年謝肉祭

モンテヴェルディは、ベネデット・パッラヴィチーノ Benedetto Pallavicino (1551-1601) の死後、1601年に宮廷楽長に昇進する。彼の初めての舞台芸術に関する経験は1605年の謝肉祭のときであった。その前年、彼は家族のことでクレモーナに滞在しており、そこから12月にマントヴァ公宛てに書簡を送っている。一部、下記に引用する。

踊り手の人数を知る必要がありますので（申し上げた通り、公爵殿下のご意向に沿う形で挿入すべく）、したがって、それがわかるまで〔作曲を〕中断することにしました。それを知るために、踊りのマエストロであるジョヴァン・バッティスタ氏へも便りを出しました⁴⁰。

モンテヴェルディは、踊りの音楽に関する案を書いたうえで、踊りのマエストロに同じ説明をすでに送っていることを公爵に知らせている。ジョヴァンニ・バッティスタについて多くの情報はないが、モンテヴェルディは1615年の書簡でも、この名に言及している⁴¹。時期

的にこの人物はイザッキノ・エブレオの息子のジョヴァンニ・バッティスタ・レナートと同定でき、宮廷での地位においても後継であったと考えて差し支えないだろう。つまり、モンテヴェルディもやはり、マントヴァ宮廷に仕えていたユダヤ人とかかわりがあり、舞台芸術の制作において連携していたと考えられるが、モンテヴェルディとマントヴァのユダヤ人とかかわりは、ほとんど話題に上がることはない。ユダヤ人の息子であったジョヴァンニ・バッティスタが、モンテヴェルディの書簡に登場するにもかかわらず、これまで言及されてきていない⁴²。その理由として考えられるのは、彼の素性である。1621年のRollo della famigliaで記載されているRenatoという苗字だと思われる表記から、それは紐解くことができる。Renatoは、Rinatoからきており、「生まれ変わった」という意味のこの姓は、ユダヤ教からキリスト教へと改宗した者にしばしば使われたものである。したがって、ジョヴァンニ・バッティスタは、ユダヤ人イザッキノ・エブレオの息子であり、父の宮廷での役割を引き継ぎ、マントヴァの音楽芸術が最も花開いていたモンテヴェルディの時代に、踊りのマエストロとして芸術文化に貢献していた、改宗したユダヤ人と言える。

おわりに

音楽劇において、現在のオペラに近づいていく過程で消滅した要素に「踊り」があった。「踊り」は、宮廷で催される舞台芸術の華やかな要素のひとつとして欠かせないものであった。舞台劇として音楽を用いた踊りの場面を作り上げる難しさ、そして踊りのマエストロと作曲家の協力体制が絶対的であることは、次のエピソードからもわかる。

歴史上でも周知の通り、1589年、フィレンツェにおいて、フェルディナンド・デ・メディチ Ferdinando de' Medici (1549-1609、在位: 1587-1609) とフランス王の孫クリスティーヌ・ド・ロレーヌ Christine de Lorraine (1565-1637) の婚礼のための祝典が行われた。このときのメインイベントとも言える5幕の喜劇『ラ・ペッレグリーナ *La Pallegrina*』の幕間に華やかなインテルメディオが挿入されている。その締めめの第6インテルメディオの第5曲〈ああ、なんと新たな奇跡 O che nuovo miracolo〉は、踊り（パッロ）を伴う場面である。この曲のために作曲を担当したエミリオ・デ・カヴァリエーリ Emilio de' Cavalieri (c.1550-1602) は、振付師でもあり、つまり、踊りと音楽を同一人物が担っていたため成功したと言われている（さらに詩がそのあとで書かれるという制作順序であったことも功を奏した）⁴³。

マンフレディはヴェルトに踊りのマエストロが誰であるかを伝えているし、また、ガッリーニの『忠実な羊飼』は、踊りの場面がうまくいかなかったために上演になかなかたどり着けなかった。『忠実な羊飼』は、1591-92年頃から企画され、幾度となく延期され、実際に上演できたのは1598年であった。なかなか上演できなかった理由の一つは、「盲女の踊り」の場면을具現する困難さにあったと言われている⁴⁴。このとき音楽を担当していたの

は、宮廷楽長のヴェルト、そして礼拝堂のオルガニストであったフランチェスコ・ロヴィーゴ Francesco Rovigo (1541/42-1597) であり、のちに礼拝堂楽長のジョヴァンニ・ジャコモ・ガストルディ Giovanni Giacomo Gastoldi (c.1554-1609) が加わった。そして、ヴィオラ奏者として着任したばかりのモンテヴェルディもまた、宮廷楽長のもとで、演奏家としてもしくは作曲家としてかかわっていたと考えられている⁴⁵。延期が続くほどの困難さを身近で見てきたのであろうか、モンテヴェルディは自身が宮廷楽長 (1601～) となって初めて舞台芸術に取り組んだ際、踊りのマエストロと十分な連携をとる姿勢を見せていることから、(踊りと)「音楽とを一緒に構想する必然性に気づいていた⁴⁶」と評価されている。

モンテヴェルディが1607年に「傑作」《オルフェーオ》を作曲するまでのマントヴァの舞台芸術の制作・上演の場には、ユダヤ人が尽力していたことが確認でき、そのなかでも「踊り」の分野での責任はユダヤ人が排他的に担っていた状況が明らかになった。また、改宗こそしていたものの、その伝統を持つ者がモンテヴェルディともかかわりがあったことがわかった。

デ・ソンミを中心にユダヤ人の演劇カンパニーは、この都市の舞台芸術の発展には欠かせない存在である。しかしながら音楽史においてモンテヴェルディの活動都市としてマントヴァでの事例が語られる際にユダヤ人についてほとんど触れられることがないのは、彼らが主として担っていた「踊り」という要素がその後の音楽劇史において薄れてしまったからか、または、ジョヴァンニ・バッティスタ・レナートように改宗していたがためにその存在が隠れていたからであろうか。新たに解明すべき課題が見えてきた。1612年にマントヴァにもゲッターが完成したことで、ユダヤ人が宮廷で活動するにあたって、環境が変わってきたことが想像できる。また、偶然にも1612年は、モンテヴェルディが宮廷楽長の職を解雇された年でもある。ゲッターの完成(ユダヤ人芸術家たちの活動の縮小)とモンテヴェルディの解雇(大作曲家の喪失)は、マントヴァの芸術文化の在り方に大きな影響があったと思えてならない。

* 本研究は JSPS 科研費 JP16H06786, JP19K12984 の助成を受けたものです。

注

- 1 楽譜が現存し、現在でも上演することが可能な最古の音楽劇は、1600年10月にフィレンツェで上演された、オッターヴィオ・リヌッチーニ Ottavio Rinuccini (1563-1621) 台本、ヤコポ・ペーリ Jacopo Peri (1561-1633) とジュリオ・カッチーニ Giulio Caccini (1551-1618) 作曲の《エウリディーチェ *L'Euridice*》である。
- 2 音楽劇の誕生の要因は複数あるが、これはその一つである。
- 3 Roberto Bonfil, *Gli ebrei in Italia nell'epoca del Rinascimento*, Firenze: Sansoni, c1991;

Emanuele Colorni, *La comunità ebraica mantovana: appunti di storia*, Mantova Ebraica: Istituto di ricercar e documentazione, 2000; Alessandro D'Ancona, *Origini del teatro italiano: libri tre: con due appendici sulla rappresentazione drammatica del contado toscano e sul teatro mantovano nel sec. 16.*, Torino [etc.]: E. Loescher, 1891; Shlomo Simonsohn, *History of the Jews in the duchy of Mantua*, Jerusalem: KTAV Pub. House, c1977; Susan Helen Parisi, *Ducal patronage of music in Mantua 1587-1627: an archival study: thesis*, Submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in Musicology in the Graduate College of the University of Illinois at Urbana-Champaign, 1989. 等を参照。

- 4 1145年の十字軍遠征時のキリスト教徒による迫害によって、フランス、ドイツ、ローマ等から避難してきたと考えられる。
- 5 詳細は添付資料「マントヴァのユダヤ人たちによる舞台上演」参照。
- 6 イザベッラ・デステの孫にあたる。
- 7 Ferruccio Marotti, *Lo spettacolo dall'umanesimo al manierismo: teoria e tecnica: storia documentaria del teatro italiano*, Milano: Feltrinelli, 1974. 等。1963年に Ferruccio Marotti によって『上演芸術に関する4つの対話』が出版(注8)されて以降、演劇の分野で顕著である。
- 8 Leone de' Sommi, *Quattro dialoghi in materia di rappresentazioni sceniche*, a cura di Ferruccio Marotti, Milano: Il polifilo, [1968].
タイトル通り4章構成になっている。第1の対話では、作詩の方法についての多くの助言が列挙されている。第2の対話では、詩のバランスについての問題を扱っている。第3の対話では演劇の実践に関するいくつかの規則が述べられ、第4の対話では、舞台装置とインテルメディオのヴァリエーションについて説明されている。
- 9 Alessandro D'Ancona, *Origini del teatro italiano*, p. 410.
- 10 Ricamatore (Leone de' Sommi, *Quattro Dialoghi*, p. 9).
- 11 ...un artigiano possi uscir poema degno di lode (Ibid., p. 9).
- 12 ...sarà fatto più esperto nel modo del condurle, che nelle proprietà loro nello invenzionarle (Ibid., p. 37).
- 13 萩原里香『音楽劇の黎明期におけるコラーゴに関する試論－舞台上演責任者という職の成立をめぐって』博士論文、東京芸術大学音楽研究科、2015年、53頁。
- 14 『セミラーミス *La Semiramis*』を指す。パルマのファルネーゼ家の枢機卿オドアルド・ファルネーゼ Odoardo Farnese (1573-1626、枢機卿: 1591-1626) に献呈された。1580年から1583年に完成したこの作品は、ヴィチエンツァのオリंपコ劇場の開場公演の際にも名が挙がっていた。
- 15 È forse un mese, e mezo, che io mandai un mio Poema boscareccio scenico al Signor Duca vostro. Se all'A. S. verrà voglia di farlo rappresentare, à pena ch'io possa credere, che a voi non ne tocchi l'ufficio del Chorago (Lettere 322, in Muzio Manfredi, *Lettere brevissime di Mutio*

- Manfredi*, Venetia: Roberto Meglietti, 1606, p. 266).
- 16 *Il corago, o vero Alcune osservazioni per metter bene in scena le composizioni drammatiche* (di un anonimo), a cura di Paolo Fabbri e Angelo Pompilio, Firenze: L. S. Olschki, 1983.
- 17 ...l'uomo sa prescrivere tutti quei mezzi e modi che sono necessari acciò che una azione drammatica già composta dal poeta sia portata in scena con la perfezione che si richiede per insinuare con ammirazione e diletto quella utilità e frutto anche morale che la poesia richiederà (Ibid., p. 21).
- 18 ...dar stanza in Mantova da rappresentar comedia a coloro che per prezzo ne vanno recitando (Supplica di de Sommi, Archivio Gonzaga b. 1349).
- 19 Ferruccio Marotti, "Introduzione." In Leone De' Sommi, *Quattro Dialoghi*, p. XLV.
- 20 Claudia Burattelli, *Spettacoli di corte a Mantova tra Cinque e Seicento*, Firenze: Le lettere, 1999, p. 181.
- 21 Susan Helen Parisi, "The Jewish Community and Carnival Entertainment at the Mantuan Court in the Early Baroque", in *Music in Renaissance Cities and Courts. Studies in Honor of Lewis Lockwood*, Michigan: Harmonie Park Press, 1997, pp. 293-305; Simonsohn, *History of the Jews*, pp. 653-655 など。
- 22 Don Harrán, *Salamone Rossi: Jewish musician in late Renaissance Mantua*, Oxford: University press, 1999, pp. 174-200.
- 23 正式なメンバーであり、Fermo という活動名であった。なお、アッカデーミア・デッリ・インヴァギーティ以外でもこの Fermo という活動名を使用している。
- 24 Ebreo は「ユダヤ人の」という意味であり、苗字ではない。苗字については後に言及するが、引き続きイザッキーノ・エブレーオと表記する。
- 25 ...le quattro canzonette del Choro, vanno cantate senza fallo; ma vanno parimente ballate. E perche à voi toccherà di fare i balli; (Lettere 323, in Manfredi, *Lettere*, p. 267).
- 26 ...l'hò già mandato; credo che S. A. Vorrà farlo rappresentare: E sò certo, che à V. S. darà il carico ò di comporre, ò di far comporre le musiche, che in esso[poema] bisognano. Laonde come scrivo à messer Leone, e à Messer Isacchino, dando all'uno alcuno avvertimento intorno à gli habiti; e all'altro circa i balli... (Lettere 324, in ibid., pp. 268-269).
- 27 マンフレディが1593年7月5日にグリエルモ公へ送った書簡に、公爵に作品を送ってから2年経ったが音沙汰がないと書いている。よって、上演は実現していない (Archivio di Stato di Mantova, Archivio Gonzaga b. 717)。
- 28 同書は1590年にヴェネツィアで出版され、マントヴァでの上演以前にもフェッラーラ等で上演されている。
- 29 上演に関して、フェッラーラに居た作者のグアリーニとマントヴァの役人間で交わされた書簡

- も多数残されており (Archivio di Stato di Mantova)、ダンコーナ (前掲書) によって調査・研究されている。
- 30 Ho incaricato di nuovo ad Isachino hebreo la cura del balletto della Cieca, et fattigli haver giovani per il bisogno... (Archivio di Stato di Mantova, Archivio Gonzaga b. 2654).
- 31 Il Balletto della Cieca ci da che fare, perché di quelli che lo provarono già, come intendo, alla presenza di V. A., [...]dopo l'assenza d'Isachino di parecchi giorni, è convenuto tornar da capo, et la difficoltà s'è ritrovata maggiore.[...] (Ibid., b. 2654).
- 32 本来は1591-92年の謝肉祭での上演を予定していた。
- 33 Domani per essere festa et comodo a tutti, et all'Hebreo in specie ho dato ordine che si ritrovano in Vescovato, per cominciare a far essercitare i Recitanti et il Ballino (Ibid., b. 2657).
- 34 Tutti questi il Bidello li condurrà a V. S. Ill.ma alli quali comandarà che ogni dì vadano da Isachino a hora terminata a esercitare il balletto (Ibid., b. 2657).
- 35 *New Grove Online*, s. v. "Massarano [Isaaco], Isacchino," by Don Harrán, accessed September 1, 2019, <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000042430?rskey=EAsF4J&result=1>等を参照。
- 36 Antonino Bertolotti, *Musici alla Corte dei Gonzaga in Mantova dal secolo XV al XVIII: Notizie e documenti raccolti negli archivi mantovani per A. Bertolotti*, Bologna: Forni editore, 1978 (Milano: G. Ricordi & C., 1890), p. 63.
- 37 Don Harrán, *Salamone Rossi*, pp. 27-31.
- 38 Archivio di Stato di Mantova, Mandato ducale, Mandati 97.
- 39 Archivio di Stato di Mantova, Archivio Gonzaga b. 395, "Rollo della famiglia del 1621."
- 40 ...essendo di necessario il saperlo (piacendolo però alla A. V. S. in tal maniera d'invenzione intercalata come ho detto) per tanto, sino ch'io lo sappia, ho tralassiato il farlo, e per saperlo ho scritto a messer Giovanni Battista ballarino... (Archivio di Stato di Mantova, Autografi 6; Claudio Monteverdi, *Lettere / Claudio Monteverdi*, a cura di Éva Lax, Firenze: L. S. Olschki, 1994).
- 41 Ibid.
- 42 例えば「舞踊団長」とだけ言及されている (デニス・アーノルド、『モンテヴェルディ』後藤暢子・戸口幸策訳、東京：みすず書房、1983年、27頁)。
- 43 萩原里香 「『作曲家』エミール・デ・カヴァリエーリ再考」、『早稲田オペラ／音楽劇研究』創刊号、2018年、39-53頁。
- 44 Tim Carter, *Monteverdi's musical theatre*, New Haven; London: Yale university press, pp. 38-44.
- 45 ヴルフ・コーノルト 『モンテヴェルディ』津上智実訳、東京：音楽之友社、1998年、57-58頁。
- 46 デニス・アーノルド、前掲書、27頁。

マントヴァのユダヤ人たちによる舞台上演

時期	タイトル	ジャンル	台本	責任者	場所	機会	備考
1489/10/28					Pesaro?	Francesco II Gonzaga 侯 (在位 1484-1519) の妹 Maddalena (1472-90) と Pesaro の領主 Giovanni Sforza の婚礼祝い。	ユダイトとホロフェルネスのストーリーに基づくもの。
1520					Ferrara	Federico Gonzaga 侯一公 (1500-40, 在位 1519-30/1530-40) の戴冠式。	Federico の報告である Mario Equicola がフェッテラ公 Ercole I へユダヤ人俳優2人の派遣を依頼 (Solomon, Jacob)
1525	喜劇	コミュニティーのメンバー			Mantova	謝肉祭、ゴンザーガ家の分家 (signor Zoanne) の邸宅にて。	このころから、劇のカンパニーが成立し、毎年カンパニーを組んで行っていた。
1549/8/7	喜劇				Mantova	Francesco III Gonzaga (在位 1540-50) と、神聖ローマ皇帝 Ferdinand I の息女 Caterina の婚礼祝い。	公卿が結婚後4ヶ月で没したため、祝典は行われたものの結婚式は行われていない。このとき行われたのは1つの喜劇で、ひとつはマントヴァの伎師、もうひとつはユダヤ人によるものだった。
1554	喜劇				Mantova		Jacob Sullam と Samuel Shalit (ユダヤ人) によって取り仕切られた。
12/1563 (Ludovico Ariosto)					Mantova	オーストリア公子 Rudolf と Ernest の来訪。	崇高なインテルメディーを伴う。
1568	劇		Massimo Faroni (Ferroni)		Mantova	謝肉祭の夜に上演。	Bernardo Tasso も準備に参加。
1575	散文喜劇		Leone de' Sommi		Mantova	Mantova, Ferrara, Parma 公らの前で上演。	
1575? 1575	牧歌的英雄的孤話		Leone de' Sommi		Mantova	Cesare Gonzaga の死。	
1581/3月? ? ? 末	喜劇		Leone de' Sommi	Meir Bassan	Mantova	Vincenzo Gonzaga (在位 1587-1612) と Margherita Farnese の婚礼祝い。	1580年、Revere 滞在中の Guglielmo 公より依頼。1581/4/30 に花嫁はマントヴァ入り。
1582	散文喜劇		Leone de' Sommi		Mantova	謝肉祭。	
1582	悲劇		Giovan Battista Gerardi Cinzio	Meir Bassan Abraham Franse	Mantova		
1582	喜劇		Leone de' Sommi		Mantova	8月の Vincenzo の誕生日。	
1583	喜劇		Caro		Mantova	予定していた謝肉祭ではなく、8月の Vincenzo 公の誕生日の際に上演が。	
1584	喜劇		? ?		Mantova	Vincenzo Gonzaga (1582-1612, 在位 1587-1612) と 2番目の妻、Eleonora de' Medici の婚礼祝い。	上演は行われていない可能性。
1584 ??	上記のインテルメディー		Leone de' Sommi		Mantova	同上。	5月1日上演。
1584?	La Rappresentazione delle Nozze di Mercurio e Filologia		Leone de' Sommi		Torino?		ザフォアア Carlo Emanuele 公へ献呈。"La Fortunata" も同時に上演。
1585	散文喜劇		Leone de' Sommi		Mantova		
	La Fortunata		Leone de' Sommi		Mantova		
	Il Tamburo		Leone de' Sommi		Mantova		
	L'Adelfa		Leone de' Sommi		Mantova		
	La Diletta		Leone de' Sommi		Mantova		
	Gli Onesti Amori		Leone de' Sommi		Mantova		Bernardino Pino da Cagli による "Gli Ingiusti Sdegni" のためのプロローグとインテルメディーとして。
	La Drusilla		Leone de' Sommi		Mantova		
	Intermezzi di Amore e Psiche		Leone de' Sommi		Mantova		
1588	Le tre sorelle		Leone de' Sommi	Abramo Sarfati	Mantova		
	L'Irille		Leone de' Sommi		Mantova		
	Zahuth Bediuta Dekidushin		Leone de' Sommi		Mantova	謝肉祭。	
1601	5幕、ヘブライ語劇				Mantova	謝肉祭。	
1604					Mantova	謝肉祭。	同時に行われた催し Guido Bonarelli の "Virginella" (インテルメディー付き)
1605	Accessi de amor		不明		Mantova	74人のキャスト、Rossi, Massarano, Basilea などがかかわる。	
1606	Delli intrighi de Amore		Torquato Tasso		Mantova	謝肉祭。	Federico Foligno による intermedio 付。
1607					Mantova	謝肉祭。	ユダヤ人、マントヴァの音楽家、都市外の音楽家を含む81人が参加。
1608					Mantova	謝肉祭。	メインイベントは、モンテヴェルディの《オルフェオ》。その他、プロの劇団による演劇もあった。

Gli artisti ebrei nella corte mantovana: sotto il mecenatismo dei Gonzaga

HAGIHARA Rika

Questo studio tratta della situazione dell'arte teatrale alla corte dei Gonzaga, a Mantova, città in cui nel Rinascimento le arti fiorivano maggiormente. Nella storia della musica è noto il fatto che proprio qui per la prima volta fu rappresentata una grande opera lirica, *L'Orfeo* di Claudio Monteverdi nel 1607. Per esaminare lo sviluppo della cultura teatrale di Mantova, sarebbe importante rivolgere lo sguardo all'attività delle famiglie di origine ebraica. Perché a Mantova particolarmente i membri della comunità ebraica si occupavano della rappresentazione teatrale nella corte del Seicento.

Dal 1525 gli artisti ebrei eseguivano periodicamente vari spettacoli teatrali nella corte mantovana per iniziativa di Leone de' Sommi, che svolgeva l'attività di corago, un responsabile della produzione teatrale che aveva l'incarico di organizzare e gestire i teatri. Prendendo ad esempio alcuni eventi come il progetto de *La Semiramis* di Muzio Manfredi, lo spettacolo teatrale *IL pastor fido* di Gian Battista Guarini e in occasione del carnevale del 1605 delle cui musiche si occupò Monteverdi, potremmo dire che in quel periodo gli ebrei assunsero quasi esclusivamente per sé stessi il ruolo del coreografo. Il maestro di ballo più importante, Isacchino Massarano era un ebreo ed il suo nome viene menzionato in alcuni documenti dell'epoca. Anche suo figlio Giovanni Battista, il suo successore nel mestiere, ma che fu convertito al cristianesimo, lavorò con Monteverdi. Si può ritenere che la presenza ebraica a Mantova abbia influenzato peculiarmente la cultura artistica di questa città, e ho anche potuto osservare quanto gli ebrei contribuirono, soprattutto nel campo del ballo.